

かんぞう

甘草 (微寒性)

主作用 = 矯味, 緩和, 解毒, 滋潤, 鎮痙, 抗化膿性炎症

マメ科の根。グリチルリチン酸の甘みは砂糖の200倍といわれ、しょう油やたばこなどの甘味料として用いられる。日本では食用が大半。

炙甘草は、切断した甘草を鍋に入れ、数分間加熱したものである。しみこむ程度の蜂蜜と少量の水を加えることもある。気力回復・食欲増進・鎮静効果が発現し心悸亢進、不整脈などの症状に用いる。



〔薬能〕

甘草は国老^{こくろう}と呼ばれ、非常に多くの方剤中に配合して緩和と矯味薬として用いられる。寒薬と用いると寒を緩くし、熱薬と用いれば熱を緩くする。また百薬の毒を消すといわれ、**大黃**^{だいおう}服用による腹痛、**炮附子**^{ほうぶし}の副作用、アルコールによる肝障害などを軽減する。

主に体内水分が不足のときにこれを潤し補う。発汗過多あるいはエネルギー代謝亢進などにより、体内水分量が減少して心悸亢進、脈結代する者を治す（処方例＝**炙甘草湯**^{しゃかんぞうとう}）。

また消化管の攣縮性疼痛、胆石症・尿路結石症などの疝痛発作や骨格筋の痙攣や痛みを止める。**芍薬**^{しやくやく}と配合する（処方例＝**芍薬甘草湯**^{しやくやくかんぞうとう}）。

そして胃腸の働きを良くし体の元気を益す。これには**炙甘草**^{しゃかんぞう}を用いる。

大棗^{たいざう}を配し、ヒステリーの精神神経症状を緩和する（処方例＝**甘麦大棗湯**^{かんばくたいざうとう}）。

その他、消炎作用、抗化膿性炎症の作用があり、熱を下し、化膿を抑え、咽喉の腫痛や排尿量・回数の減少、排尿時痛、口舌の瘡に用いる。上気道炎、気管支炎、咳嗽、喘息に用いる。これには**甘草**^{かんぞう}を用いる。

「炙甘草」と「甘草」の作用の違いは？

炙甘草は補気、生甘草は抗化膿性炎症（清熱解毒）作用が主体。

★ここに注目！

甘草の副作用について

甘草は体内水分が不足するときにこれを潤し補う作用があるが、可笑しなことに一般的にこれが副作用として注意書きされている。しかしこれは甘草の主作用の一つである。甘草を単味で使用することはなく、体内水分が多ければ利水の生薬を配合するのが方剤学の基本である。

例外的に**桔梗湯**^{ききょうとう}と**芍薬甘草湯**だけは甘草の比率が高く、長期に続ける場合の注意書きをすべきである。